

雛祭ひなまつり（大野恵造おおのけいぞう）

飾かざ古代こだい雛ひな現代げんだい雛ひな
灯雪洞俱酌白酒
緋毛氈与瓶中桃
微醺主客染眦艶

飾かざるは 古代こだいの 雛ひな 現代げんだいの 雛ひな

雪洞ほんほりを 灯ともして 俱ともに 白酒しろざけを 酌くむ

緋ひなるは 毛氈もうせんと 瓶中へいちゅうの 桃もも

微醺びくんの 主客しゅきやく 眦まなじりを 染そめて 艶あでやかなり

解説 雛祭を詠った詩。

語釈 ※雛祭Ⅱ女子の健やかな成長を祈る節句の年中行事。※雛Ⅱ女子などの玩具にする小さい人形。※雪洞Ⅱ下端に台座をつけた小さな行灯。※灯Ⅱともしび。とうか。※白酒Ⅱ雛祭りにおいて祝いのために出される酒※緋Ⅱ濃く明るい赤色。緋色。※毛氈Ⅱ獣の毛の繊維をひろげ延ばし、加熱・圧縮してフェルトにして幅広の織物のようにしたもの。※瓶中Ⅱ瓶の中。壺の中。※微醺Ⅱ少し酒に酔うこと。ほろよい。※眦Ⅱめじり。

通釈 雛祭に飾るのは、昔の雛、そして現代の雛。雪洞を灯して、皆で祝の酒を飲む。緋色なるは毛氈と瓶の中の桃である。少し酒に酔った客は眦が赤く染まり一層、艶やかになる。